

おつかれさま 新たに教職員になった みなさんへ



この4月、教職員になったみなさん、おつかれさまです。一学期の仕事はいかがでしたか？

たいへんなこと続きで「まいったな？」とつぶやくことが何回もあったのでは。

そんなとき、職場の諸先輩の話を聞いたり、学習会や「おしゃべり会」に参加したりして「解決の糸口」を見つけたら、「ストレス」を発散したりといろいろと考え行動してきたのではないかと思います。

夏休み、まずは体をゆっくり休ませて下さい。そして、自分の時間をとって下さい。その合間にこの特集を読んでいただき、秋からの実践のヒントを見つけていただきたいと願っています。

教師になったみなさんへ

上尾市立大谷小学校 青木 明美

これって、あたりまえ

いられません。

ありのままの自分で

私は上尾市で仕事をしていますが、どの学校でも若い先生方がものすごい時間を学校に縛られています。朝7時前に出勤して、夜9時過ぎまで学校にいるのです。朝2日分弱の勤務時間に当たる14時間です。土曜日にも出勤しています。みなさんの学校でもそうでしょうか。教師の仕事はきりがありませんから、実際にやることは山ほどあるのは確かです。でも、そのような働き方を「当たり前前」と思っていないませんか。教師も一人の人間として生きています。若い先生なら恋愛や結婚に関わる時間も必要でしょう。文化的な時間や友達との交流の時間も必要でしょう。疲れ知らずの若い体にも心にも、休養は必要なのです。さらにこうした働き方が若い人だけでなく、どの年齢層にも広がっており、それゆえますます若い先生は帰りにくくなっているとも言えます。文科省もその実態を認め対策をとる必要に迫られているほどです。まず、「このような働き方は変だ」と認識し、勤務時間短縮の一步を一緒に踏み出してほしいと願わずには

みなさんが元気に教師生活を過ごすためにどうすればいいかを考えました。

まずは「子ども・親・同僚とは本当の自分のまま（自然体）で関わった方がよい」ということです。教師になると、もうその日から先生と呼ばれ、なんだか偉い人になったようで「ねばならない」という固定観念にとらわれやすいのです。これは人と関わるにとってもじやまな観念です。本当の自分はそうは思っていないのに、「教師だから：ねばならない」という発想で伝えても説得力がありません。子どもや親の心にも響きません。いわゆる建前ですね。これは見透かされます。未熟な部分はあつて当たり前なのですから、無理はしないことです。「先生は知らなかった。教えてくれてありがとう。」「そうなんだ！先生もやってみるよ。」こんな言葉を子ども達はうれしそうに受け止めてくれます。私自身、本当にうれしいこと、おもしろいこと、かなしいこと、驚くこと、

腹の立つことを言葉にするようになってから、子ども達や保護者との距離が近づいた気がします。

やわらかく 明るく まっとうに

自分自身が未完成極まりない人間だということを自覚していると、自分の中でだいたいの子ども・親・同僚を受け入れることができます。「まっ、そういうこともあるよね。」という感じです。共感するということです。その先には「一緒にがんばろう」という努力の方向が見えてきます。たとえば親の要望もしくは苦情が届いたとします。この声はわざわざ私に教えてくれていることですからありがたいことです。率直にお礼を言って、話を聞いて、できること・できないことを伝えます。本音で話せば、だいたい了解してくれます。若い先生も大丈夫。保護者から何か話があったときに「自分は力がたりませんが」という前提で謙虚に話を聞き、自分が今できることを全力でやれば道は開けるといふもの。同僚にも本音で何でも聞いていいのです。「できる」自分を見せようとしないうことです。まだ、教師としては「一年生」なのです。本当の自分をさらけ出し「一緒に考えてください」というスタンスで子ども、親、同僚とつながる努力をしていくと良いと思います。

みんなで話し合いながら

私は今、教育に関わってとても気になっていることがあります。それは教師はもつと自由であるべきではないかということです。教師自身の「時間の自由」がないばかりか、学校のあり方も「自由」から遠ざかっています。管理職の一存でなにもかも決まってしまうのは「当たり前」なことではありません。学年単位・校務分掌などで提案したことを自由に意見を出し合った上で全教職員の決めたこととして実行していくことが、学校の本来のあり方です。「話し合いで決めていく」ということは「民主的」ということです。なぜ、大事かというと、「命令や管理」と違って、みんなの力で改善の積み重ねや進歩が大きく広がっていくからです。この「民主的」という感覚がないと、子どもに対しても「言うことをきかせる相手」として管理的な関わり方をしてしまいます。たとえば、最近「黙ってそうじをしないさい」という指導があります。子どもがふざけてそうじをしない状況をなくするためなのでしょう。確かに働くときはみんな協力して一生懸命取り組んでもらいたいものです。協力するには話し合いや声かけが必要です。そういう会話も禁止して「黙ってやれ」というのは表面上の「一生懸命」を求めるものであって、働く価値・協力し合う喜びからほど遠いものです。それは結局、子どもたちから人間的成長を奪ってしまうことにならないでしょうか。自分の教師としてのあり方をいつも見つめて欲しいと思います。

自分なりに考えて

また、学習における「自由」も欠かせません。このことと思い出す場面があります。

若い先生と算数のＴＴで一緒に授業をしたことがありました。円の学習のときの話です。その先生と事前の教材研究をして、「この学習の部分は教科書のやり方では子どもにとってもわかりにくい」と一致して教科書と少し違う方法で学習することにしたのです。翌日の授業では、黒板にお盆を転がして円周を比べるという導入でおもしろいものでした。子ども達の反応も上々でした。ところがその後は、前日にわかりにくいと確認していた展開で授業を進め、案の定子ども達はわからないまま授業が終わってしまいました。授業後「どうしたの？」と聞くと「やっぱり、教科書通りじゃないと不安になって……。」と、その先生は申し訳なさそうに私にいました。みなさんも授業をする際、よりどころとして指導書が手放せないということはあるかもしれませんね。指導書や教科書通りはだめといっているわけではありません。その教材と向き合ったとき、「子ども達にわかりやすいか」「興味を持てるようなやり方か」を自分なりに考え、疑問があったら一工夫するというのは、教師の専門性に関わる「自由」なのだと思います。

なんか変だな？を言う

これらの自由を実感できる学校ならば、みなさんは若い力をもっと発揮できるはずです。自由にものを言い、いいと思う方法で授業を組み立てる若い先生とわいわい論争をしてみたいものです。「学校に早く来るのは当たり前」「出勤したらそうじをしろ」「自分の仕事は後にして空気を読んで仕事をしろ」こんな不条理な命令に負けてはいけません。少なくとも「なんか変です。」とぼそっとつぶやいてください。これらはパワーハラスメントと言って、管理職や先輩教師が言ってはいけない言葉の数々です。

一人じゃないんだよ

決して自分一人で悩みや迷いを抱え込んではいけません。必ず、みなさんの話を聞いて力になってくれる人がいます。また、本音で語り合える仲間や学びの場を探し求めてほしいと思います。悩んでいることはたぶん、みんな一緒です。勇気を出して一歩を踏み出してください。

教師を育てるもの

さいたま市立岸中学校 高田 肇

はじめに

法隆寺の宮大工で名匠として名高い西岡常一さんの著書に『木に学べ』がある。一見、教育とは無縁のように思える本だが、至る所に示唆に富む話が出てくる。「棟梁は、木のクセを見抜いて、それを適材適所に使う」「木のクセを見抜いてうまく組まなくてはなりません、木のクセをうまく組むためには人の心をくまなakisません。」と言った具合に。私たち教師の仕事も、人と人とを組ませることがよくあり、西岡さんの話からは学ぶことが多々ある。

文豪吉川英治さんは、「人みな師」という言葉を色々な場面で使った。私たちは実に多くの人から様々なことを学んでいるのだが、私自身の教員人生を振り返ってみても、私を育ててくれた多くの「師」が浮かんでくる。

教育講演会で出会った 講師から学んだこと

まだ20代半ばで教職員組合に入って間もない頃、教育

研究集会で聞いた三上満氏の講演は、私の教員人生に決定的な影響を与えてくれた。その講演の中で三上氏は、『マルクスの教育論』だとして「人間というものは実に不完全な存在である。その不完全な存在である人間が行う教育もまた不完全なものである。したがって、教育も教育を必要とする。」というような内容の話をしてくれた。その時の私には、この言葉を論理的に分析・解明する余裕などなかったが、それ以来、年を重ねれば重ねるほど、意味の深い言葉として私の実践を支えつづけ、不完全さを補うための努力を続けるようになった。常に自分が不完全であるという認識があるからこそ「学びたい」「学ばねばならない」という気持ちが沸いてくることも自覚できたのである。

子どもたち、保護者、 同僚から学んだこと

教員生活25年目で出会った生徒たちは、「教育が集団的営みである」ということを教えてくれた。この学年は、3年間学年職員がそのまま持ち上がりとなり、メンバーが一人も変わらなかった。職員相互がお互いを理解し合

えると、必然的に一人一人の学年内での役割が浮かび上がってくる。持ち味を十分に発揮した指導が出来るようになったのだ。「先生たちは仲が良い」という雰囲気は生徒にも伝わり、学年全体を穏やかにさせてくれた。この学年では、いつでも生徒のことを話題にしてよく語りあった。また、各自が読み終えた小説のことを語りあったり、見てきた映画の話をしたりという具合に、豊かな会話が飛び交っていた。それが、学年全体の実践をも豊かにしてくれたと思っている。

また、保護者との結びつきを重視し、ことあるごとに行事への保護者の参加を呼びかけていた。修学旅行のお小遣いの額を決める際には、保護者の代表を学年集会に招き、「パートで1万円を稼ぐには……」という話をしてもらった。そして、真にお互いを理解しあうことが出来たのです。ややもすると『ケンカをさせないように……』という意識ばかりが先行してしまう管理的な考え方に鉄槌を喰らわされた思いでした。人が育っていく上で何が大切なのか、教師は何を大切に生徒と向き合わなければならぬのか、君たちは教えてくれました。」

文学作品から学んだこと

山田洋次監督の映画「学校」はパート4まで続いた人氣シリーズだったが、その第1話での授業風景は「授業とはどうあるべきか」を真剣に考えさせてくれる場面であった。夜間中学校の西田敏行扮する黒ちゃん先生のクラスでは一人一人が「幸福論」を語る。生徒は真剣に「幸福とはなんだろう」という作文を書き、それを発表する。授業の最後に「俺たちばかりに語らせて、先生もなんとか言つてよ」と問いかけられた黒ちゃん先生は、「授業っていうのはクラス全員が汗かいて、みんなで一生懸命になつてつくるもんなんだ。それよくわかった。……良い授業だった。どうもありがとう。」といつて深々と頭を下げる。その時チャイムが鳴り、黒ちゃん先生は教室を出て行く。

私は、教育実習生が来ると、このDVDを見ることを勧めている。

習うことから学んだこと

もう7年もアルトサックスを学んでいる。「50の手習い」でなかなか上達しない。習い始めて3回ほどレッスンに行った時「やっぱり身の程知らずの取り組みだった」ことを痛感し「やめよう」と思った。しかし、その日のレッスンで若い講師の先生が「高田さん、吹ける吹けないは別としても、サックスを持つている姿はナベサダに似て

いますよ。」と言ったのだ。私は、とっさに「この若い先生のように、自信をなくしている生徒たちに勇気を与えることが出来るだろうか。」と自問したのだった。そして、このレッスンは「サックスが吹けるようになる」ということだけが目的ではなく、「習う側の気持ちを実感する」ことにもあることを理解した。教える人にこそ習うことが大切であることを痛感したのであった。

おわりに

今、子どもたちが置かれている状況は一言で言うならば「育ちにくい時代」だということだ。社会環境の変化や家族のあり方の変化など様々なことが理由にあげられるが、最も憂えるべきことは、「将来に対する夢が持てない」と思っている子どもたちが増えていくということだ。それは、子どもたちだけのことでなく、若い先生たちにもいえることである。「先生が育ちにくい時代」でもあるのだ。

フランスの詩人ルイ・アラゴンは、「教えるとは共に希望を語ること。学ぶとは真実を胸にきざむこと。」と語った。私たち自身が希望を語れる生き方をしているかどうか。仲間との間で希望を語り合っているかどうか。まずそこから見直そう！



新任者を迎えて

埼玉県立栗橋北彩高等学校 山崎 敏子
(学校事務職員)

大量退職・大量採用の昨今、今年も職場に新採用の若者達がやってきた。実は我が娘も、4年の臨任経験を経て、この春採用されたひとりである。4月からの一人暮らしで、不安の種は尽きないが元気にやっていると信じ、なるべく心配しないことにしている。

そんなわけで、我が娘にお節介を焼けない分、娘を応援する同じ気持ちで一生懸命な新任者達に、陰ながらエールを送り、見守っている。

実際、新任者はつらい。いつも笑顔で、元気があって、それが当たり前だ。朝早くから、職員室の電話番をし、放課後は部活動にまい進。研究授業に初任研、日替わりの会議と、合間に割り込んでくる突然の生徒指導案件、毎日が課題の連続である。帰宅が10時を回ってしまいうのも無理からぬことだ。時に本人の要領や段取りの悪さもあるだろうが、先の見通しを持たない(まだ持てない)ので、常に

仕事に追いまわされていて、ほつとする暇がない。現場が忙しいから、ついつい促成栽培の器用な新人を求めて、「あの

気持ちのゆとりを

伊奈町立小針中学校養護教諭 黒須 勝枝

子は使えないね」と、値踏みするありさまで、(その気持ちもわからないではないが)本当に残念だ。

新任者には、多いに失敗して、頭だけでなく、手も足も、ハートも、全部使って、悩みながら1年を過ごしてほしい。事務職員と新任者が深くかわかることはそうはないけれど、背伸びしない地のままの姿を、これからは温かく見守りたい。

「もっと勉強したいんです。学習会があつたら誘ってください」「(世の中の出来事、子どもや学校をとりまく状況に対して)おかしいですよ。変えていきたくないです」と目を輝かせる若い先生に出会うことが多くなってきました。頼もしく感じるとともに、そんな青年たちの期待に応えられる学習会を企画しなкゃ、子どもの成長を語れる日々の実践をしなкゃ、たたかうべきところではしっかりとたかかわなкゃと決意を新たにしています。

今、私が保健室実践をする中で心がけていることは、気持ちのゆとりを持つて子どもたちと出会うことです。最初に笑顔で「どうしたの?」と声をかけることができれば後の対話はだいたい上手いくから不思議なものです。そのために私は、「からだ」が疲れすぎないよう気をつけています。初任者の先生方は、ゆとりもなく、寝る間もないような毎日だと思いますが、無理しすぎずに、どうぞ自分合った方法で心と体のケアをしてください。

新任者の声

「教員になって」

中学校新任教員

本日も夜9時まで仕事、しかし正直、本採用として勤務できている事に安心しています。安心感から仕事に元気に取り組むことができています。

昨年は臨採、一昨年は東京にて非常勤講師をしていました。東京では契約期間は、短い時で一ヶ月、長くても半年でした。学校は代わる代わる、毎週教科はバラバラ、落ち着いて生徒と向き合うことはできませんでした。悔しさや、教育のあり方に「ゆるされて良いのか」と不満が募りました。収入も先行きもあいまいなまま、結婚や第一子の誕生がありました。今この経験から、喜びをもって教壇に立っています。なにひとつ変わらぬ情熱をもって。

元気の源

県立高校新任教員

4月に本校に赴任してから毎日がめまぐるしく過ぎ、気づけばもうすぐ夏休みです。この3ヶ月間を振り返ってみると、私の頭も生活も「部活動」でいっぱいでした。顧問をしている卓球部の部員は男子のみで、県大会にも出場する程の力をもっています。毎日朝、昼、放課後と練習をして土日には大会や練習試合に参加します。オフを作っても、結局近くの卓球場にみんなで行ってしまうほど卓球が好きな生徒達です。

学生時代に部活動をやっていなかった、運動が大の苦手な自分が、この子達を指導できるのかなと最初は不安でたまりませんでした。練習の後、授業や初任研の準備をしていると学校を出るのが9時、10時になってしまいう日もあります。体力的に辛い日もあり、この生活を続けられるのかなと悩んだ時期もありました。

それでも、今日まで顧問を頑張ってこられたのは、「先生なりのアドバイスでいいからベンチコーチをやっています。」

「先生がオーダーを決めて。」

「先生は頑張ってる!!」

そんな子ども達の一言があったからです。何より、子ども達が頑張っている姿や上手なプレーができた時の嬉しそうな顔を見ると疲れも吹き飛び、また頑張ろうと思えます。今では部活動が私の元気の源です。

笑顔が一番大事

特別支援学校教員

仕事を始めて3ヶ月、研究授業を終え一息入れたいところですが、なかなかそうもいかず忙しい日々です。学校を出るのは8時、9時、ときには10時をすぎることもあり、正直言って疲れもたまっています。でも子どもたちは本当にかわいいし、やりがいも感じます。もちろん自分の力不足を感じることも多いのですが…。

そんな私ですが、元氣が出るのはなんとと言っても子どもたちの笑顔と素敵な先生方の存在です。特に私は周りの先生方に恵まれていると感じます。先生たちと遅くまで「ああでもない、こうでもない」と色々話し合いながら授業の準備をしていると授業を創っていくのって楽しいなと思います。失敗したとちよつと落ち込んでいた研究授業の反省会でも、多くの先生方が自分では全然気づかない「よかった」点をいっぱい指摘してくれました。(励ましてくれていたのでしょけど…)

組合の先生はじめ多くの先生が「困ったことがあったら何でも言つて」「失敗して当たり前」「先生が笑顔でいることが一番大事だから無理しないで」などと言ってくれるし、いっぱい授業のアドバイスもしてくれます。

そんな素敵な先生たちと一緒にこれからも頑張つていこうと思います。

